2024 ● Spring No.57

Kwansei Gakuin Archives Newsletter

学院史編纂室便り

No. 57

特集：学院史

2024・春学期

1 中道 基夫 関西学院院長 『学院史編纂室便り』発行再開によせて

2 神田 健次 学院史編纂室顧問 学院史編纂の意義と展望

3 井上 琢智 学院史編纂室主任研究員 なぜ、私は学校史に関心を抱いたか

5 阪 智香 関西学院大学商学部教授 第2教授研究館（池内記念館）の思い出

6 学院史編纂室 活動報告

6 赤江 達也 学院史編纂室長 編集後記――学院史への「扉」

『学院史編纂室便り』発行再開によせて

関西学院院長・関西学院大学神学部教授　中道　基夫

『歴史とは何か』

45年ほど前になりますが、関西学院大学神学部1年生の授業でE.H.カーの『歴史とは何か』を読み、レポートを書くという課題が出されました。その時この本の内容をよく理解できたわけではありませんが、一つの衝撃を受けたのを覚えています。高校で世界史や日本史を習い、教科書に記載されている歴史的事実を覚えるという勉強をしてきた者に、この本は歴史についての新しい認識を与えてくれました。その当時の私は、動かしようのない中立的な歴史的事実というものがあり、その連続性と関係性を綴っていくのが歴史だと理解していました。しかし、カーによれば歴史的事実自体が客観的に存在するのではなく、それも歴史家が数ある出来事の中から一つの出来事を選択し、それに意味を与えることによって歴史的事実が生まれるというのです。そこには、歴史家自身の社会的、個人的背景、そして思想が影響を及ぼすことになります。歴史そのものは客観的なものではなく、主観的な要素を含むものであり、歴史家の選択と解釈が変われば歴史は大きく変わるという主張に驚き、歴史とはいったい何だろうかと考えさせられました。このような認識を持つと、暗記の対象であった冷たい歴史が、表情を持つ生きた存在に感じられてきました。もちろん、歴史家は資料に基づいて客観的に歴史を綴っており、フィクションを描いているわけではありません。しかし、この歴史がどのような背景を持って「歴史」となっているのかを読む目が必要であり、そして、今日、私たちはどのような歴史を綴ろうとしているのかということを顧みなければならないということを教えられました。

言い換えるならば、歴史を綴るということは、過去の連続する事柄を客観的に再構成するということでありますが、それ以上に何を大切にし、何を現在に訴えたいかという現代の思想の表明であるとも言えます。また、これまでに叙述されている歴史も、一体どのような歴史観のもとで描かれたものであるのかを知る必要があります。

このように考えるならば、関西学院の歴史を編纂するという作業も、単に史料を収集し、それを整理し、過去の興味深い出来事、人物の業績を掘り起こすというだけではないと言えます。学院史編纂という仕事は、現在、一体どのような出来事や人物に注目し、どのような解釈によって歴史的事実を選び出し、それらをどのように繋ぎ合わせようとしているのかを問う作業でもあります。

関西学院の歴史を問う

1998年に『関西学院百年史』（通史編Ⅱ）が刊行されて以降、社会全体が大きく変化すると共に、関西学院も大きく変わってきました。『関西学院百年史』は神戸三田キャンパスと総合政策学部の開設の報告と阪神・淡路大震災に関する数行の記載で終わっています。2008年以降、初等部ができ、学校法人聖和大学、学校法人千里国際学園と合併し、関西学院大学にも新しい学部と研究科が開設され、関西学院は幼稚園から大学院までを持つ総合学園へと大きく変わりました。そして、現在、関西学院の発祥の地である王子公園に新しいキャンパスを作ろうとしています。

「関西学院は、1889年9月28日にアメリカ南メソヂスト監督教会の宣教師W.R.ランバスにより創立された」という文言は、関西学院のあらゆる文書の冒頭に書かれており、関西学院の歴史的事実です。しかし、これだけが関西学院の創設の歴史ではなく、様々な創設の歴史的事実を持つ学校が一つになって現在の関西学院が成り立っています。かつて関西学院が上ケ原キャンパスの中学部・高等部・大学だけで成り立ち、その視点から描かれていた関西学院の歴史を、今後どのように描き、どのような歴史を共有していくのかが問われています。

2023年度は『学院史編纂室便り』を休刊していましたが、この度全面リニューアルされ『学院史編纂室便り』の発行が再開されましたことを心から嬉しく思っています。それは単に再開の喜びだけではなく、これからの学院史編纂室の働きに期待する喜びでもあります。

関西学院の歴史を綴っていくということは、単に歴史を掘り起こし、興味深いエピソードなどを紹介することではなく、たえず関西学院の過去の歩みを検証しつつ、その歩みを未来に継承していくことだと考えています。学院史編纂室の働きが、そしてこの『学院史編纂室便り』がそのような関西学院の歴史を創り出すプラットフォームになることを切に願っています。

（なかみち　もとお）

学院史編纂の意義と展望

関西学院大学名誉教授・学院史編纂室顧問　神田　健次

カナダ・アメリカへの資料収集の旅

学院の歴史編纂と筆者の関わりは、1986年の夏に二週間、当時の室長小林信雄先生と山内一郎先生と共に北米の宣教師資料の調査・収集のために、カナダのトロントにあるカナダ合同教会（UCC）のアーカイブ及びアメリカのドルー大学におけるメソジスト資料のアーカイブに出張したことに原点がある。そこで、ランバス宣教師やベーツ宣教師等、学院に大きな足跡を残された宣教師の方々に関する資料調査と収集を集中して行うことを通して、歴代の宣教師に関わる一次資料に出会い、学院史研究の重要性を深く自覚させられた。それ以降、学院史研究に関わる機会が与えられ、これまで学院の百年史の共同編集のプロジェクトに参与し、『関西学院百年史全四巻』（1994-98年）、『関西学院事典』（2001年）、『増補改訂版 関西学院事典』（2014年）等を共同で刊行した。

学院史の共同研究の経験から

『百年史』編纂のプロセスから、1991年以降学院史研究の成果を公表する『関西学院史紀要』が刊行された。特に専従の研究者がいない中、『紀要』が30号に至るまで継続して刊行されてきたことは、重要な意義をもっている。筆者は、W.R.ランバスやC.J.L.ベーツ、H.W.アウターブリッヂ等の宣教師について研究論文を寄稿し、共同研究として「宣教師研究」を推進してきた。これまでW.R.ランバス著『医療宣教：二重の任務』（2016年）、あるいは『ベーツ宣教師の挑戦と応戦』（2019年）等の共同の研究成果を刊行する機会が与えられた。また忘れがたいのは、戦前の韓国からの留学生に関する共同研究である。約100名近い神学部の留学生を、韓国の監理教神学大学の李徳周教授との共同研究を通して、その全容を解明できたことは、この分野では先駆的な意義をもっている（『学院史紀要』第15号、第16号を参照）。さらに戦時下との関連では、特に中央講堂東側の広場に建つ旌忠碑の記念碑に関する共同研究があげられる。この碑は、1939年10月の創立50周年記念式典の一環として定礎式が行われ、翌年2月に完成している。石碑には碑文と日清戦争以降の学院関係戦死者168名の氏名が刻まれている。2001年に、この石碑の歴史的位置付けと平和への祈りとそのための働きを示したプレートが据えられ、この碑に関する『関西学院史紀要 資料集Ⅰ 旌忠碑』（2004年）が編纂された。

建学の精神とスクールモットー

学院の寄附行為第3条に明記されているように、「キリスト教主義」に基づく教育が学院の建学の精神であり、またベーツ院長によって提唱された「マスタリー・フォー・サーヴィス」がスクールモットーである。学院の重要な背骨とも言える建学の精神やスクールモットーは、これまで各時代状況の中で新たに受け止められてきたが、それらが曲解され歪められることのないように、歴史編纂や共同研究によって繰り返し検証されてきた。学院史研究の共同研鑽を、教職員や学生にその成果を還元する上で、まさにこの点が肝要である。学生の教育に還元してきたもう一つの試みは、1995年の秋学期より学部の垣根を超えた総合コース「関学」学を開講し、来年で30年を迎えようとしている。このような試みは「自校教育」と呼ばれ、私立大学の重要な柱ともなっている。また大学博物館の常設展示は、これまで培ってきた編纂室の資料収集・整理と研究成果を反映したものであり、自校教育の一環と位置づけることもできる。

今後の課題と展望

まず編纂室の主要な任務は年史編纂と言えるが、大きな課題としては150周年の年史編纂をどうするかということであろう。既に『百年史』全四巻が刊行されているので、例えば、それ以降の50年の歴史を、写真を豊富に織り込みつつ編纂することも可能な方法である。どの方法を選択するとしても、125周年に刊行した『関西学院事典　増補改訂版』はデジタル化されているので、それを150周年にむけて更新しつつ活用してゆくということは容易に着手できることである。もう一つの重要任務は、やはり地道な共同研究を推進して『学院史紀要』の一層の内容的充実を図るということである。従来の「宣教師研究」と「戦前・戦中・戦後」に加え、「オーラルヒストリー」と「学問と社会」が新たにスタートしたことは喜ばしいことである。このような共同研究が一層充実することによって、建学の精神とスクールモットーの新たな理解と深化を求めつつ、教職員や学生、同窓への還元が可能となるであろう。最後に言及したい任務は、ランバス宣教師関連の学校と教会との連携と協力である。学校に関しては、既に合併した聖和大学の年史編纂には協力しているが、他に啓明学院と広島女学院、併せてランバス宣教師が展開した瀬戸内宣教圏の諸教会との連携と協力も必要と言えるであろう。

（かんだ　けんじ）

なぜ、私は学校史に関心を抱いたか

学院史編纂室主任研究員（元経済学部教員）　井上　琢智

Ⅰ. 学校史への私的関心

関西学院大学経済学部・同大学院研究科博士課程を出て、1976 年 4 月、大阪商業大学商経学部の経済思想史担当の専任講師となった。大学・大学院時代は、大学闘争と「関西学院大学改革に関する〔小寺武四郎〕学長代行提案」に沿った改革の時代であった。この改革時代の 1971 年 12 月には学内の差別発言に関する公開質問状が部落問題研究部より出されたことを契機に人権問題の研究と教育が本格化した。

大阪商業大学時代、給与・研究条件改善を求める組合運動に参加し、書記長として編集・校正を担い『みんなで大阪商業大学教職員組合 15 年史』(1981) を刊行した。他方、同志社で経済学をも教えた D・W・ラーネッドの『経済新論』(1884) を邦訳した同校出身の牧師宮川経輝（つねてる）が 1886 年に設立し、内村鑑三も務めた泰西学館を調査・研究した（本校の経営を大阪商業大学が引受けた）。さらに大阪川口居留地に設立されたミッション・スクールの調査・研究のため川口居留地研究会を仲間とともに組織し、『大阪川口居留地の研究』(1995) を刊行した。この研究会の関連研究である大学史研究会 (1998) や神戸外国人居留地研究会 (1999) に参加した。

Ⅱ. 関西学院史への関心

(1)『関西学院組合史』編纂への参加

1985 年 4 月、関西学院大学経済学部に移籍した。関西学院教職員協議会の「組合員ノートに関する委員会」の答申にそって旧『組合員ノート』は学内の例規集と歴史とに分離され、前者は『あすく』(1987) として出版され、後者は 1988 年から編集委員会による編集が開始され、おそらくは外部の教員組合の活動で知り合っていた当時の関西学院教職員協議会の専従からの推薦があったためだと推測するのだが、私も同委員会委員に就任し、最終的に委員長として『あすく 別冊 組合活動の記録 1946-1989』(1990) を刊行した。

(2)『関西学院の 100 年』へのコメント

他方、関西学院の創立百周年の記念出版のための記念出版専門委員会は 1987 年 12 月に開催され、1989 年 11 月に図録『関西学院の 100 年』が刊行された。その編集途上に同委員会の山本栄一委員から「粉砕か創造か―旗の章」のゲラが手渡された。同時代に学生・院生であった立場からコメントを求められた。どのようなコメントをしたかは記憶にないが、記憶にあるのはこの時代の学生運動を「紛争」と呼ぶか、「闘争」と呼ぶかであった。前者は大学側の立場を示し、後者は学生の立場であった。私は後者を支持し、せめて「紛争」と括弧をつけることを示唆したが、最終的には括弧なしの「紛争」であった。

さらに、1991 年 6 月、『関西学院史紀要』が学院史資料室から刊行され、この創刊号で、上記図録へのコメントの中で指摘したのは、新たに編纂される『百年史』で実現すべき課題として、1)「教育・研究機関としての関西学院・学部が、日本の学校史・教育史・内外の学界での位置づけ」、2) 従来の学校史の多くが「上からの学校史」であったことを反省し、生徒・学生・職員・教員の生活史を描くこと、3) 教育機関としての関西学院が「出来得なかったこと、為すべきでなかったこと」を歴史的に反省し記録すべきこと、これらである。

(3)『百年史』執筆への参加

1990 年関西学院 100 年史編纂委員会が、翌年には関西学院百年史編集委員会が設置され、井上も委員を委嘱され、学院史資料室がその事務局となった。

『百年史』公刊以前の『開校四十年記念』〔村上謙介〕、『五十年史』〔武藤誠〕、『六十年史』〔武藤誠〕、『七十年史』〔大道安次郎ら 3 名〕が示すように編集委員会形式を採りながらも主たる編集・執筆は個人が担っていたが、今回の場合、14 名の編集委員が各章の項目単位で執筆し、互いに草稿に目を通し、完成原稿とした（井上の担当は全 10 章中 7 章の項目を担当）。

この編集・執筆に際しては、学校史・自校史が「一つの学問分野を構成する」当時の状況を踏まえ、「客観的な資料批判に基づく実証的アプローチを基本」に、1)「一私学の歴史の枠組みに留まることなく、日本近現代史、教育史、教育行政史との関連を重視し」、2)「建学の精神を考察し、キリスト教主義学校としての学院の歴史像を組み立てる」、3) 本学の「教育・研究が果たしてきた役割の再認識とともに、将来への展望を明確にする手掛かりとなる提言や問題提起ができないかを模索すること」とした。その結果、

『関西学院百年史』は、資料編２巻、通史編２巻の全４巻が1998年に全巻刊行され、翌1999年に『関西学院百年史 1889-1989 通史編索引』（訂正一覧含む）が刊行された。

なお、全巻刊行後、中野実〈東京大学・大学史史料室〉「学校史は広義の精神史―『関西学院百年史』に寄せて―」、文学部の海老坂武「大学と私―『関西学院百年史』を読む―」、総合政策学部の藤田太寅「ランバスの頃のキリスト教伝道―『関西学院百年史』を読む―」が『関西学院史紀要』（第６号、2000）に掲載されている。

(4) 関西学院における学校史の刊行の特性

このような関西学院の年史編纂・出版の特徴の一つは、各学部・部局史として『関西学院高等商業学部二十年史』(1931) を皮切りに、『関西学院事典 増補改訂版』(2014) までに18点、それ以降４点の計22点が出版されており（詳細は「関西学院史」『事典』85頁。なお、『関西学院大学心理学研究室80年史（1923～2003)』(2012) への言及はない)、さらに2014年以降『関西学院大学図書館史』(2014)、『世の光たれ！：関西学院高等学部商科開設100周年記念誌』(2014)、関西学院大学博物館編『Gift for the future: 未来に贈る125年：1889-2014』(2014)、『Thy Will Be Done―聖和の128年』(2015) など多様な学校史が編纂・刊行されていることであろう。また、学内の生徒・学生の課外活動を描く部誌については、以下の『関西学院事典』に示されている。

(5)『関西学院事典』(2001)

本書の出版計画は、当初百年史編集の継続事業として法人に提案したが、受け入れられることなく、同委員会は1998年３月に解散した。しかし、第二ミレニアムを記念した創立111周年記念事業を実施するとの法人の方針に沿って、学院史資料室が同事業に応募し採択され、2000年「学院史資料室」が「学院史編纂室」に改組され、休刊していた『関西学院史紀要』の継続発刊が計画され、翌月関西学院事典編纂委員会と同編集委員会が立ち上げられた。

この『関西学院事典』刊行のアイデアは「座談会 関西学院百年史を考える」(『関西学院史紀要』創刊号) の中での山本栄一経済学部教授の発言 (206-207頁) によるもので、歴史も人物名も何でも出てくる『関学事典』の刊行(2001年に刊行) であった。「この時は夢であった」この事業を実現できたのは、「心意気だけが問題だ」と指摘し、山本学院史編纂室長の「心意気」とその「心意気」にほだされ、「エンジンをかけた」井上であり、それを支えたのはすでに広報室に移籍していた川崎啓一氏の招聘であり、『百年史』、その通史編の『索引』から協力をあおいでいた辻美己子氏の続投であった（「編集後記」)。また、『百年史』編集・執筆中の成果を生徒･学生に還元するために1995年以降「『関学』学」を開講し、「建学の精神」の生徒・学生への継承の徹底であった（井上「いかにして大学の『建学の精神』を伝えるか―『「関学」学』の位置づけと意義―」『日本大学史紀要』〈11〉2009)。

聖和大学 (2009)、千里国際学園 (2010) との法人合併、言語コミュニケーション文化研究科 (2001)、司法研究科 (2004)、経営戦略研究科 (2005)、理学部の理工学部への改組 (2002)、人間福祉学部 (2008)、教育学部 (2009)、国際学部 (2010)、初等部設置 (2008) など学院内の拡大･発展を紹介する必要性から、創立125周年記念事業の一環として、増補改訂版を出版した (2014)。この増補改訂版のWebによる公開は、その初版の編集・執筆段階から計画されたものであった。本学学校史がこのような形で公開されたのは、きわめて先駆的な試みであった。

（いのうえ　たくとし）

essay

第2教授研究館（池内記念館）の思い出

関西学院大学商学部教授　阪　智香

私が第２教授記念館の研究室に初めて入ったのは、関学に奉職が決まった1998年のことでした。この建物は南側東部分が池内信行名誉教授の遺志と遺産によって造られました。そのため、皆この建物を、親しみを込めて「池内」と呼んでいましたので、ここでも「池内」と記したいと思います。

「池内」での思い出は尽きませんが、特に印象深いのは１年目（1998年）の３つのできごとです。

①初めて担当した講義は400人近い履修生のいた簿記でした。試験前に学生が研究室に質問に来ました。ひととおり説明すると、「わかりました！」と元気よく帰っていきました。翌日にはその学生が友達を連れてきて…どんどん人数が増えました。良く学び、楽しい学生たちでした。1年後、この学生たちはゼミに来てくれ、卒業後も長く付き合いが続きました。初年度の輝きの思い出です。

②初めてのゼミ選考の時期に、「トントン」と研究室のドアをノックする音。私「はい」。学生「谷口先生はいらっしゃいますか？」（谷口は私の旧姓です）。私「私です」。学生「えっ！」。大学教員らしからぬ若かりし日の思い出です。

③アメリカ、スイス、スペイン、日本をインターネットでつないだ国際会計の授業に「池内」から参加しました。日本のメンバーは、平松先生と大学院生（現経営戦略研究科の中島先生、国際学部の児島先生を含む４人）と私でした。研究室のインターネット回線を増強し、苦戦しながら４か国の教員と学生が同時双方向で議論し課題をこなすという当時としては画期的な授業でした。時差もあり、「池内」にほぼ終日６人が籠って取り組んだ濃密な時間でした。授業後、アメリカ会計学会に合わせて、アメリカの先生が４か国のメンバーをサンディエゴの自宅に招待して下さり、初めて皆に会えた時は感激しました。この授業は1998年のThe Joint AICPA（アメリカ公認会計士協会）/AAA（アメリカ会計学会）Collaboration Awardを受賞しました。「池内」から世界を経験した思い出です。

その後、「池内」で過ごした25年間に、多くの出会いを得ました。研究室で、学生の質問を聞き、卒論の指導をしました。大学院の授業も行いました。学生の相談や悩みを聞くこともありました。休日に研究室にいると、卒業生が子連れで寄ってくれたこともありました。「池内」は、ひとり一人の学生とじっくり向き合う貴重な場所でした。学生が、新しいチャンスに挑戦するにあたって背中を押したり、困難を克服するにあたって、参考にと自身の体験を話したり。「池内」での語らいをステップとして、学生が伸び伸びと成長していく様子は、眩しくもありました。「池内」は、学生が自分自身の旅の途中で寄港して、元気を取り戻し、次なる海図を得る場所だったのかもしれません。

そんな「池内」は、私にとっても、ほっと一息つける港のような場所でした。夕方、授業を終え、明かりの点いた北側玄関をくぐる時は、自宅に戻ったような安心感がありました。

「池内」が最も華やぐのは桜の時期でした。私が好きな景色は、２階の窓から見える桜の風景です。窓枠が額縁のようになり、玄関上の装飾とともにまるで一幅の日本画のような美しさでした（写真１）。

写真１　「池内」の窓からの桜風景は日本画のような美しさ

写真２　「池内」１階の気品ある談話スペース

「池内」の美しさを語る上で外せないのは、１階の気品ある談話スペースでした（写真２）。手前には、「真実の追求」のプレートが掲げられ、簾の向こうには、常緑の美しい中庭を臨むことができました。「池内」は、俗世間の名利（名誉と利益）から離れ、「真実の追求」をするにふさわしい場所であり、私にとって「心泰く身寧き処」でした（白居易『香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁』をふまえて）。「池内」を離れることは寂しいですが、引っ越し作業を終え、これまで四半世紀にわたって私の研究者人生を見守ってくれたこと、多くの大切な出会いを授かったことに深い感謝の念を込め、ここにお別れいたします。「ありがとう、さようなら」

（さか　ちか）

活動報告

刊行物

『関西学院史紀要』第 30 号（2024.03.15 発行）目次

論文

関西学院〔高等学部文科英文学科・文学部英文学科〕の英語教育と研究―竹友藻風、志賀勝、曽根保、岩橋武夫、寿岳文章を育てた人びと―（下）/ 井上琢智

寿岳文章―知識人の肖像― / 中島俊郎

上海と周辺地域における W・R・ランバスの活動 / 趙怡

書評論文

書評　神田健次著『W・R・ランバスの使命と関西学院の鉱脈』を読み解く（二）―中国でのアメリカの圧倒的存在感とエキュメニカル思想を貫いたランバス― / 福井幸男

書評　池田裕子著『関西学院のエスプリを追って―カナダ、アメリカ、ラトビアへ―』―ファミリーヒストリー「草刈正雄」をはるかにしのぐ感動のドラマ―（関西学院大学出版会、2023 年 5 月 25 日刊行）/ 福井幸男

資料

神崎驥一日記　四 / 井上琢智

記録

第 55 回関西学院史研究会（2023.11.7）

戦間期（1919 ～ 39）前半における関西学院―『恒久平和』運動と英文学教育・研究― / 井上琢智

第 56 回関西学院史研究会（2023.12.1）

寿岳文章の仕事：民藝運動への貢献を中心に / 神田健次

寄稿

《評伝》松本道弘―英語道― / 松本篤弘

学院史編纂室共同研究報告

「宣教師研究」舟木譲、「関西学院の戦前・戦中・戦後」井上琢智、「関学オーラルヒストリー」山泰幸、「関西学院の学問と社会」荻野昌弘

おもなイベント

2023.11.07　「第 55 回関西学院史研究会」開催

演　題：戦間期（1919-39）前半における関西学院―「恒久平和」運動と英文学教育・研究―

講　師：井上琢智氏（元関西学院大学学長、元経済学部教授、学院史編纂室主任研究員）

2023.12.01　「第 56 回関西学院史研究会」開催

演　題：寿岳文章の仕事：民藝運動への貢献を中心に

講　師：神田健次氏（関西学院大学名誉教授（元神学部教授）、学院史編纂室顧問、神戸バイブルハウス理事長）

2023.10.03　駐日ラトビア共和国特命全権大使による講演会開催　経済学部主催（学院史編纂室共催）

テーマ：“Mission Latvia. A country where determined people have a mission and ambitions”
―ラトビア、鋼の意思を持つ人々がミッションと大志を抱く国

講　師：ズィグマールス・ズィルガルヴィス氏（駐日ラトビア共和国特命全権大使）

編集後記――学院史への「扉」

『学院史編纂室便り』再開号をお届けいたします。

この号は、『資料室便り』No. 1（1985）から数えて第 57 号にあたります。学院史編纂室の前身「学院史資料室」は、1978 年に旧図書館で発足しました。その後、1984 年に旧日本人住宅（現在の関西学院会館）、1998 年に現在の時計台 1 階へと移り、2000 年に「学院史編纂室」へと改組しています。

1990 年代には、『関西学院百年史』（全 4 巻・索引）が刊行されました。その間、『資料室便り』は休止しますが、1998 年に判型を B5 から A4 に改めて再開します。2000 年に『学院史編纂室便り』へと改称し、以来、年に 2 回、2022 年度まで継続的に発行してきました。この間のご協力に感謝いたします。

この度、新たなデザインとともに『学院史編纂室便り』を再開いたします。再開にあたっては、英語誌名を Kwansei Gakuin Archives Newsletter と定め、表紙に掲げました。中央の「57」は号数で、1985 年から積み重ねてきた『便り』の歴史を示しています。上部中央のロゴマークは、時計台と書物をあらわしています。表紙を縁取る枠線は、学院史編纂室入り口の「ドア枠」を模しています。

第 57 号では、これまでの学院史編纂を担ってきた方がたに「学院史」の意義と展望、編纂の経験について寄稿していただきました。また、キャンパスの記憶を記録するために、2024 年 3 月で歴史を閉じた第 2 教授研究館（池内記念館）についてのエッセイをお寄せいただきました。本誌をお読みいただいているみなさまにも、寄稿をお願いすることがあるかと思います。その際には、よろしくお願いいたします。

学院史編纂室では、年 2 回の『学院史編纂室便り』とともに、年 1 回、『関西学院史紀要』を刊行しています。2023 年度には、第 30 号を発行いたしました。『紀要』では、関西学院の歴史に関する論文や資料を掲載・発信しています。みなさまの専門の立場から、関西学院史の研究を進めていただき、その成果を投稿していただけたらと願っております。

本誌の新しい表紙が示しているように、学院史編纂室は、西宮上ケ原キャンパスの時計台 1 階に位置しています。時計台の正面から入ると、すぐ左側にクラシカルなデザインの木製「扉」があります。そこが、学院史編纂室の入り口です。時計台にお越しの際は、本誌表紙の枠線と同じかたちの「ドア枠」を、ぜひご覧ください。そして、学院史編纂室にご用の際には、お訪ねいただけたらと思います。

（学院史編纂室長　赤江　達也　あかえ　たつや）

『学院史編纂室便り』第 57 号
2024.6.15　(ISSN 2436-1518)

関西学院大学 学院史編纂室
〒662-8501 西宮市上ケ原一番町 1-155
TEL: 0798-54-6022 FAX: 0798-54-6462

https://ef.kwansei.ac.jp/archives（日本語）
https://global.kwansei.ac.jp/archives（英語）